特定非営利活動法人 希望と輝きのまちひがしねを創造する

第43号 2021年1月

クリエイトひがしねニュース

発行 NPO法人クリエイトひがしね 999-3796 山形県東根市中央1-5-1 タントクルセンター内
TEL 0237-43-1155 www.higashine.org 発行責任者 菊 地 和 博

休館から見えてきたもの

タントクルセンター
子育てセンター長 丹 野 久 江

新型コロナ感染防止のために休館となったけやきホールに立ち全館を見廻した。無音の空間だ ― 心が冷えた。オープン以来子どもを中心に来館者220万人。ここで子ども達が得たものは何だったのか、ふとこの空間いっぱいに字幕を拡げて書きたい文字が浮かんだ。「成 長」。毎日子ども達は走り・跳び・叫び・挑み・失敗し・発達し・自分を見つけ自分を育てていた。ここは子どもの自分育ての絶好の空間だったのだ。

スタッフが集った。「ここへ来れない子どもはどうしているのだろう」「孤独の子育てを嘆いていた母親が気になる」。淋しい、もどかしい苦しい・・ その中で声が上がった。私たち子育て支援者は今こそ力を出すときだ。私たちがまず支え合おう。三本の矢、否一束の矢となったら何かが出来る！

人とは距離を、いや人の心の距離は、いくらでも近づける。発信者になろう。出来ること出来ないことを議論し、空間・時間の綿密な割り出し、そして内容の点検を。

発信行動開始 ― 電話で、メールで、ブログで、さあ扉を開けよう、ゆうぎしつ、けやきっずひろば・サロン（すくすく・わくわく）、育児の必須講座。

× × ×

電話相談が増え続けている。初めてという人が言った。電話は心隠さず話せてすっきりし、耳からの言葉は心の整理がしやすいことを知った。これで安心だ。

ゆうぎしつ・サロンは少人数だから一人一人と話すことが出来て親しめた。短縮時間だから間を置かず質問があり、みんなで聞き合いひとつの輪ができた。ここは顔の見える支え合いの場 ― 固まっているのは自分だけじゃない ― 安らぎの顔・顔・顔。

これからも次々と課題は出てくるだろう。でも、それに向き合う勇気が私たちの心に湧き出している。

繋がり・寄り添い・支え合う

世界中を震撼させている新型コロナウイルスで生活様式が一変しました。この一年間の経験から、私たちは何を学び、どのように活かしていくか、各職場からのレポートです。

総合受付

2020年は世界中の誰もが予測していなかったことが起こり、これまでまったく経験したことがない静かなさくらんぼタントクルセンターとなりました。利用者の方々と、お会いする機会が激減してしまってから一年になろうとしています。多くの制約があるにもかかわらず、感染拡大防止にご協力いただきながら、利用していただいている利用者の皆さんには大変感謝しております。

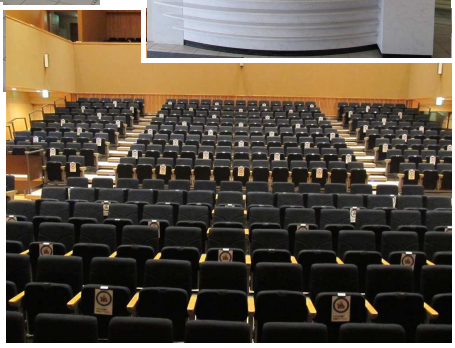
何でもやりたいことが出来る、行きたいところに行ける、自由に会いたい人に会える、人と人との繋がりを持つ、当たり前のことが当たり前になるまでは、もう少し時間がかかると思われます。

東根市だけではなく、山形県内外にも大きな存在感のあるタントクルセンターが、更なる地域の活性化と、未来を担う子どもたちの明るい将来につながる施設となれるよう、不断の努力を惜しまず、日々の業務に備えていきたいと思います。

当分の間、当センターの貸館は、これまでと同様に会議のみの利用とさせていただきます。利用者の制限（山形県内在住者のみ）、使用時間の制限（２時間まで）、定員の大幅削減等々、感染防止対策は続けさせていただきますので、皆さんのご理解とご協力をお願いいたします。ご不明な点は、どうぞお気軽にお問い合わせください。

コロナウィルス感染症の収束を願いながら、徐々に制約が解除され、多くの利用者に笑顔でお会い出来る日が一日も早く訪れることを願っています。

大事な人たちの"命を守るため"に皆様、お互いに乗り切っていきましょう。（加藤美樹）



けやきホール

けやきホールは、人数制限や感染症対策をしながら開館しています。以前は３歳以上の子どもたちが多く、小学生たちの集う居場所にもなっていましたが、現在では利用する年齢が0才児からと低くなりました。「子どもが歩き始めてからけやきホールへ」という流れがなくなり、歩き始める前から広い場所でのびのび遊ばせたいという願いから足を運んでくださる親子が増えています。けやきホールの最大の特徴である遊具の使用を制限しているため、遊びを生み出すための環境設定を変えていく必要がありました。スタッフ一人一人が親子と関わる中で感じたことや遊びの様子、子どもの成長など、気づいたことを毎日閉館後に話し合い、いま目の前にいる親子に何が必要なのか、限られた条件の中でどんな工夫ができるのかアイディアを出し合い、実行する日々です。その中で一番気づかされたのは、子ども達の遊びの原点です。子ども達は遊具がなくてもいろんなモノや人に興味を持ち、やってみたいと思ったら夢中になり、モノが無ければ想像力をはたらかせ、限られた環境でもそこに遊びの要素を見つけ出し楽しんでしまうということです。今の状況がよかったとは言えませんが、コロナ禍でなければ気づかなかったこと、挑戦できなかったことがきっとあったはずです。

これからどんな社会になっていくのか、この様な状況がいつまで続くのか想像できませんが、子ども達の成長は待ってはくれません。どんな状況でも子ども達の成長を第一に考え、支援していくことがけやきホールの使命だと感じています。けやきホールに小学生たちの笑い声と活気が戻ってくることも私たちの願いです。子どもだけで自由に遊びに来られる時が来ることを切に願って、子どもが子どもらしく居られる場所を守っていきます。

（高樫幸江）

子育て支援センター

ファミリー・サポート・センター

繋がり・寄り添い・支え合う

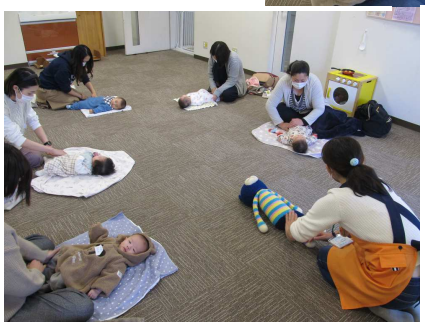
世界中を震撼させている新型コロナウイルスで生活様式が一変しました。この一年間の経験から、私たちは何を学び、どのように活かしていくか、各職場からのレポートです。

ゆうぎしつは定員５組限定で開館しています。平均２～３組の親子が来館し、お子さんはのびのと動きまわり、ママ同士はスタッフと情報交換しながらゆったりと過ごしています。人と人とが関わる時間が少なくなっている今、ゆうぎしつに来てくれた親子が過ごしてくれる時間を大切にしていきたいと思います。

子育てについて学ぶ場として、９月より０～４ヵ月児対象のすくすくサロン、11月より５～８ヵ月児対象のわくわくサロンを開催しています。45分間という短い時間ですが、毎回子育てに役立つ情報や赤ちゃんの体の発達について伝えながらふれあい遊びを楽しんでいます。参加者からは「出かけるきっかけになってありがたい」という声も聞かれました。引き続き居場所づくりを続けていきます。

サロンで伝えきれない内容は、定期的に育児講座として情報発信しています。その中で、12月5日（土）には、「育児に参加したいけど何をすればいいのか分からない」父親向けの講座を開催しました。参加者からは「学んだことを妻と共有し子育てにつなげていきたい」「赤ちゃんのことを理解するいい機会になった」との感想が寄せられました。今後も多くの父親の参加者を期待し、引き続き開催の予定です。

感染症や豪雪がネックになって来館できない方々について、すぐ相談できる体制が必要になっていることが感じられ、今後もWithコロナの"今"子育てをしている方のニーズに応えられる子育て支援を行っていきます。現在、電話相談を受け付けており、毎月数件の相談が寄せられています。（植松朋美）



コロナ禍で子育てに困った方々に対応しようと、これまでに閉鎖することなく通常開館し、依頼の調整・新規会員登録の対応を行ってきました。毎年、習い事への送迎依頼が一番多いのですが、感染予防対策のため乳児健診や通院、学校行事、園行事にきょうだい姉妹を一緒に連れていけないためファミ・サポを利用する方が多く、依頼件数が昨年よりも多い状況です。また、新規登録会員は県外出身や転勤で他県から引っ越しをしてきたため近くに頼れる人がいないという方がほとんどです。安心安全にあずけたりあずかったり出来るように顔合わせを兼ねた事前打ち合わせを行い、依頼日当日は検温などの健康のチェック、協力会員の方へはマスクを着用しての依頼の対応をお願いしています。

利用会員の中に「どうしたらいいか困ったとき、ふとファミ・サポを思い出しました」という声がありました。いざというときのファミ・サポとして、より多くの子育て中の方に向けて引き続き広報周知を行っていきたいと思います。

昨年は研修会や交流会などの開催が出来ませんでした。小児救急や子育てに関することを協力会員のスキルアップ、フォローアップとして学ぶ研修会、安心して「あずける」「あずかる」ことが出来るように会員同士顔をあわせる場や、協力会員を知ってもらう機会である交流会の開催も必要と考えています。従来の形にとらわれず、柔軟な発想でWithコロナの新しい形を検討していきます。

今年も感染の予防を徹底しながら、援助活動を引き受けてくださる協力会員のみなさんへの感謝の気持ちを忘れずに、より安心安全な活動が出来るように援助活動の橋渡しをしていきます。（渡辺友美）

2020年は大人にとっても子どもにとっても激動の年となりました。そのような中だからこそ、以下のような支援業務を行っています。

HPを活用した家の中での遊びの紹介や子どもと作る料理の紹介、「withコロナ時代の子育てを考える連続講座」と題し４回の講座を開催しています。第１回は、気になる子どもの行動理解から居場所や遊び場の役割と必要性についての内容でしたが、市議会議員や育成会、教育・保育関係の方にも視聴していただき、多くの反響をいただきました。中でも、忙しい毎日に追われ我が子が産まれてきてくれたときの「ありがとう」という気持ちを思い出したといった感想もあり、職員一同、子育て支援の仕事への意欲と必要性を再確認しました。

また、一堂に集まってのイベントが制限されている中ですが、少しでも明るくなれるようオンラインクリスマス会を開催しました。奥山サンタと来園者のお父サンタ５名によるサンタクイズや、見習いサンタの大運動会をお茶の間に配信しました。まだまだ先行き不透明ですが、子どもの遊びに寄り添い時代に沿った支援をお届けしていきたいと思います。

現在、あそびあランドは白銀の世界となっています。冬眠しない子どもたちと一緒になって、遊びを楽しむ大人の姿も見られます。子どもたちが全力で遊びきれるよう大人も楽しめる環境づくり、関係づくりに力を入れています。これからは、遊び場にいる人だけでなく、インターネットやビデオなどを活用し、離れていてもつながっている遊び場、ひとりぼっちをなくしていく遊び場を目指していきます。

（斎藤翔太）

事務局の窓

★コロナ禍で人々の生活が制限され、あっというまに１年が過ぎてしまいました。行動を自粛しなければならない世の中に気持ちまで萎縮して、「やれない・できない」ということは、なんだか鬼ごっこの鬼につかまってしまった感覚です。いかに「今」を楽しみながら充実させていくか、逆転の発想でコロナに挑戦し、挑戦することで新たな地平に達し、試行錯誤しながら必要な技術を習得し実践していく。失敗することがあってもフォローしてくれる仲間がいれば乗り越えられます。鬼の手のひらの中にあり直接会ったり、不特定多数との交流が制限されますが知恵を出し合えば可能です。理事会や主任会議、あそびあランドでのクリスマス会などのオンライン活用は鬼ごっこの感覚、鬼の隙をつき様々な可能性を仲間と共に見つけていく。まさにWithコロナ時代のオンライン活用の根っこは「遊育」の精神そのものです。（ＭＫ）

オンライン理事会モニター画面

11月

12月

★事務局長のご指導ご鞭撻により、11月と12月のオンライン理事会に参加することが出来ました。41号に書かせていただいた「第三の波」の実体験でもあります。菊地理事長は自宅の書斎、伊勢副理事長は車の中、本間理事はマゼラン星雲の彼方からでしょうか。とにかくどこにいても繋がっていられる時代を実感しました。

ところでモニター画面に映っている、新型ハゲウイルスに感染しているような画面にショックを受け、12月の理事会は思わず帽子をかぶったまま参加しました。不信に思った理事長から、どうしたのかと聞かれましたが、「ハゲ感染帽子」と言いそびれてしまいました。というわけで今年もよろしくお願いします。（ＭＴ）

編 集 後 記

◆昨年は暖冬でほとんど雪のない冬を過ごしました。今年は昨年の「10倍返し」ともいわれる大雪に見舞われて、あそびあランドにとっては我が世の冬なのですが、その上を覆う新型ウイルスの影響をもろにうけてしまいました。タントクルセンターも感染防止の制限の中でいつものような子どもたちの元気な声がきかれません。まだ先が見通せませんが、まず私たちがめげないことが大事な時期です。（Ｍ）